

乳がん超音波検診 精査の要・不要，コツを伝授します

角田博子，尾羽根範員(著)

札幌ことに乳腺クリニック統括管理部長

白井秀明

日々悩んでいる検診の現場が 切望していた本

近年乳がん検診の必要性はメディアやピンクリボン運動などによって広く示され，その普及が進むにつれ，これまで行われてきたマンモグラフィのみでの検診に限界があることが指摘されており，超音波検査を併用した乳癌検診へ注目が集まっています。そのような中，実に良いタイミングで『乳がん超音波検診——精査の要・不要，コツを伝授します』が医学書院から出版されました。本書は，日々精密検査の可否に悩む検診の現場が切望していた本だといえるでしょう。

まず乳がん検診によって起こり得る利益と不利益より，超音波検査が果たす役割を示すことから，超音波検査が問題とされている病変の拾い過ぎ，いわゆる過剰診断を減らすことを目的とした内容になっています。特に「Ⅰ. 検診についての10の基本」の中で述べられている「検診は癌による死亡を回避する手法であることは確かですが，一方このような過剰診断という不利益もあるということを検診に携わる医療者は真摯に受けとめ，また受診者である一般女性にも知って頂く必要があるでしょう」(p.7)という一文は，今日の併用検診が抱えている問題を鋭くついており，“あれば何でも拾っておけ”“わからないからとりあえず精査にしよう”という気持ちでは検診に臨めないことをよく指摘しているものと思います。

「Ⅱ. 腫瘍」「Ⅲ. 非腫瘍性病変」では，日本乳腺甲状腺超音波医学会(JABTS)の『乳房超音波診断ガイドライン』(改訂第3版，南江堂，2014年)で用いられているカテゴリー分類に沿って，多くの症例画像と適切なコメントがわかりやすく配置されており，どの項目から見ても理解しやす

い本になっているのが特徴です。正しく要精査基準を理解し，過不足なく病変が拾い上げられる「眼」を養うため，典型例から判定が難しい症例まで多くの症例画像によって画像の読み方がまとめられており，さらにその問題点に対して，正しく判別するためのポイントやちょっとしたコツなども数多く掲載されています。

またもう一つ本書ならではのと思われるのが「Column」であり，随所に配置されています。これは実際に検査を行う場合に必要な装置の具体的な設定方法や探触子の走査方法，またBモード法以外の判定方法について解説されており，実際に検査を行う上で不可欠なコツなどが実にわかりやすく書かれ，即役立つ内容になっています。したがって本書は先ほどの『乳房超音波診断ガイドライン』とともに使用することで精査の可否のポイントがより理解できるものと思います。

乳腺超音波検査は，これまで主に精査機関で活用されてきましたが，今後はますます検診施設などでも用いられることが予想されます。このような中で本書は日々の現場の疑問を解消してくれる力になるばかりでなく，これから検診機関で働く医師や技師の教育のための教本としても最適であると考えられます。本書の内容を多くの医療従事者が正しく理解し，活用できれば必ずや救命効果の高い乳癌検診が行えるものと確信いたします。



●B5/頁 176/2016 年
定価：本体 6,000 円＋税
[ISBN978-4-260-02814-1]
医学書院 刊